

児童思春期専門外来（Child adolescent outpatient）を受診されているご家族様、診察の待ち時間や日常の隙間時間にお気軽にお読みください。

特別企画

ジブリで学ぶ子どもの心②

Chao通信の特別企画「ジブリで学ぶ子どもの心」第2弾。第一弾の＜となりのトトロ＞に続き、＜千と千尋の神隠し＞が題材です。

今回も臨床心理士/公認心理師の岩倉拓先生と一緒に、ジブリ作品を通じて子どもたちの心の成長について考えていきましょう。

＜千と千尋の神隠し＞

ーなぜ千尋の両親は豚になったのか？ー

千尋の世界が怖い理由



今回のジブリで学ぶ心理臨床学は「千と千尋の神隠し」になります。「千と千尋」はジブリの一番のヒット作で人気が高い作品です。しかし、実は結構難解で謎も多いといえましょう。たとえば、千尋達が迷い込んだ世界はどこなのか？ 登場するキャラクターの意味するものは？ などと考えはじめると、わからないと思うところも多いのではないのでしょうか？

この作品からは、宮崎監督が自分の作りたいものを自由に作っていることが伝わってきます。さまざまなテーマが込められていて、奥行きが深く、見返す度に発見があります。ジブリ作品の中でも円熟味と芸術性が高く、そして現代そのものが描かれているという点でも意義深い作品です。心理臨床学の視点で言えば「となりのトトロ」に比べると応用編になりますが、今回も「謎」を設定しながら解読していきましょう。

「となりのトトロ」では宮崎監督は子どもが持つ空想（ファンタジー）の力と、その成長の姿を描きたかったのだ、と書きました。トトロでは「おばけ」であるトトロや猫バスは、サツキとメイの味方で、成長を助ける「よい」goodな存在です。「おばけ」は本来怖いものですが、さつきやメイにとっては好奇心そのものであり、困難を乗り越えるポジティブな力になっているのです。これはサツキとメイの環境が肯定的で保護的であり、2人が育んできた「心理的な潜在力」が活かされて発揮されている、と私は感じます。

この「心理的な潜在力」は最近の臨床心理学では「レジリエンス」（反発力・柔軟性などと訳されます）と言われ、「ストレス」や「トラウマ」と対になる言葉で、心理的危機を乗り越えるこころの強さを指します。困難にただ打ちひしがれるのではなく、立ち向かって乗り越えていく力として注目されているのです。この力が一体何なのかを知ることがこの連載全体の目的の一つでもあります。辛い時を乗り越える力は誰もが身につけたいものですね。



さて、まず一つ目の問いは「千と千尋の神隠し」に登場するキャラクターたちが、トトロとは大きく異なっているのはなぜか？ということになります。トトロのように保護的な存在もいるにはいますが、さまざまな個性的なキャラクターが登場してきます。千尋を脅し、働かせる湯婆婆、わがままそのものの大きな赤ん坊の坊、千尋を助けるかと思うと冷たくする二重人格のようなハク、そして謎の力オナシ……。その世界では、人間の千尋は歓迎されていないようで、仕事をしないと豚や石炭に変えられてしまうようなのです。トトロと違い、千尋はシビアで怖い「悪い」(bad)な世界に迷い込んでしまったのです。といってもホラー映画のようにひたすら恐怖というわけではありません。闇一色の世界ではなく、釜爺やリンさんのような助力してくれる存在も息づいています。ただトトロの世界よりもずっと複雑で入り組んでいるのです。千尋の迷い込んだ世界がなぜ怖くて複雑なのか？それは千尋のこころの状態がサツキとメイとは大きく異なっていて、それが反映されているから、と考えられます。



では、冒頭のシーンから丁寧にみていきましょう。物語はトトロと同じく「引っ越し」から始まります。しかし、元気だった2人に比べ、やせっぽちの千尋はあきらかに無気力でかったるい表情です。新しい学校に「あっかんべー」をしています。千尋は引っ越しと転校に全く納得していない

ようです。友達からもらった花束がしおれ悲しむ千尋ですが、その気持ちに思いやることもなく、母は「しゃんとしてちょうだい」と千尋を注意します。千尋が感じている落ち込みや悲しみを汲むことはなく、両親は自分たちの都合に精一杯のようです。そして、千尋はひたすら無気力でそれに反抗するというわけでもありません。引っ越しの理由はよくわかりませんが、千尋は大人に振り回され、本当は不満を抱いています。トトロのお母さんなら「ああ見えてあの子たち無理していたと思うの。さつきなんて聞き分けがいいからなおさら」などという”神対応”で、千尋の苦労や真意を汲み取ろうとするでしょう。

しかし、千尋のお母さんにはそんな余裕はないようです。迷い込んだ世界の入り口で、正しくもその不穏さを感じ「やめよう!」と両親を止める千尋に対して、母はまず「千尋は車の中で待ってなさい」と言います。そして渋々着いてくる不安な千尋に「千尋、そんなにくっつかないで。歩きにくいわ。」と突き放します。この一連の母親の対応を、私は「ジブリ史上に残る”塩対応”」と呼んでいます。千尋が危なっかしく川を渡るときも「気をつけなさい」と言いながらも振り向きもしない母の姿には首を傾げざるを得ません。



一方で千尋のお父さんに目を向けてみましょう。がたいのいいサラリーマンの父は、こちらも高級外車をぶっ飛ばし、後部座席の千尋の様子は気にもとめていないようにみえます。怖いもの知らずなのか、祠など神聖なものには目も暮れず、油屋の世界にズンズンと入って行ってしまいます。母が川を渡る時は手を貸すのですから、妻には気遣いはあるようです。しかしこれまた娘には手を貸しません。そして、屋台に並んだ美味しそうな食事を、お店の人もないのに「カードで払えるでしょ!」とガツガツと食べ始めてしまうのです。母親もそれに従います。豪快とも言えましょうが、この貪欲さと無神経さ。失礼ながら「俗物」と言う言葉が浮かんできてしまいます。そして食べ物をたらふく詰め込んだ2人が豚になってしまうという衝撃的な幕開けを迎えます。



トトロで書いたように、現実から迷い込んだ世界は千尋のころの世界であり、空想（ファンタジー）であり、夢の世界とすることができるでしょう。

精神分析の夢理論からは、たとえ意識的なところに反したとしても、夢の中で生じることは、その人のころの世界の反映であり、登場するキャラクターはその人のころの部分なのです。



さて、ということは？ 私はこう考えます。

千尋は身勝手に引越しを決行し、それでいて千尋の悲しみや不満に共感してくれない両親に振り回され、悲しんでいたのです。そして、彼女の気持ちをないがしろにされることにひどく怒っていたのです。実際の千尋は、不満は押し込め、怒ることもあきらめ、無気力で、あまりご飯を食べない少女になっています（千尋の痩せっぽち具合は、私たち専門家から言えば心配です。体格をさつきやメイと比べてください）。そんな千尋にとって、両親のイメージはまさに貪欲で自分勝手な「豚」だったのです。千尋はあの時、無意識に「お父さんもお母さんも豚みたいだ!」「お父さんもお母さんも嫌いだ!豚になっちゃえ!」と思っていたのです。それがファンタジーの世界=夢の世界で実際に起こってしまいました。元を辿れば、実はそれは千尋の望んだことだったのです。完璧な大人などは存在しません。なので子どもは「親なんか大嫌いだ!」「親なんか死んじゃえ!」というbadな気持ちを時にはもつのです。もちろん、それが全ての気持ちという訳ではなく、千尋のこの後の戦いはお父さんとお母さんを人間に戻すことが目的になるわけですから、永遠に豚になってしまっは困るのです。とにかく千尋は怒りによって両親を豚に変えてしまい、得体の知れない世界に一人ぼっちになってしまったのです。帰り道が閉ざされ、怖いお化けたちが闊歩する世界で千尋はピンチに陥ります。



この千尋の両親像はジブリ映画の中でも特筆すべきキャラクターで、他のジブリ作品ではこんなにも俗的で、ある意味では身近なキャラクターをみることができません。他のジブリ作品では、親はとても思い



やり深い良い親ですし、たとえ悪者であっても、もっと信念や戦略があります。この両親はそういうわけでもなく極めてリアルです。私は2人を「俗物」と感じますが、人のことは言えません。それはまるで自分とも重なってきます。

他者や子どものことにそこまで気を回す余裕がなく、「ちゃんとしなさい」と口を出し、学校行きなさい、勉強しなさい、と怒ってばかり。それでいて自分達は美味しいものには目がなくて、自己中心的。子どもを愛することや育てることが目的のはずなのに、いつのまにかお金を稼ぐこと、美味しいものを食べることを、贅沢することが目的になってしまっている。千尋の両親は、そんな現代のリアルな私たち大人なのです。そして、その大人の世界の中で育っていく子どもを描きたかったのだと私は感じます。子どもたちはそんな矛盾に満ちた親に反発を感じたり、怒ったりしています。そしてその一方で大事なことは、その同じ親を大事に思い、切実に必要としているのです。



さて、あの世界が千尋のこころの反映であること、そして「千と千尋」が現代のリアルなこころの複雑さを描こうとしていること、この2つの理解を元に考えると、登場するキャラクターの意味するところが浮き彫りになってきます。

湯婆婆は、「働かざる者食うべからず」と考える社会の規範や義務を表していると考えることができましょう。それは厳しいこころの部分です。そして後半に湯婆婆には双子の銭婆婆というやさしい魔女がいることがわかってきます。そして大きな赤ん坊の坊は、泣きわめいてわがままを言いたい千尋のこころの部分 reflects しています。カオナシは、名前の通り自分の顔を無くしてしまった寂しい千尋であり、それは両親とも重なります。カオナシは貪欲な欲望を隠し持っていることが後でわかります。そして、少年ハクはいったいなんなののでしょうか？ハクは湯婆婆に弟子入りしていますが、必ずしも悪そのものというわけでもないようです。

油屋の世界のキャラクターが、千尋のこころの反映であり、黒い部分や欲望、怒りなどを表している。それは、まさに現代に生きる私たちが抱えているこころの闇とも共通しているでしょう。そして、もちろん闇だけではなく、力や希望も隠されています。この理解の鍵を身につけることで、この後の千尋の冒険の物語の意味を理解する準備が整います。千尋は自分の中の闇の部分と戦い、そして自分の中に力を発見し、成長していくのです。それは「となりのトトロ」よりもずっと危険に満ちていて、それだけに実のある戦いでもあります。そして何よりも、私たちにとって見習うべき、重要な戦いであるからこそ私たちの心を打つのだと思います。千尋の顔つきが後半に従って引き締まって逞しい表情になっていくのを見逃さないでください。



前回の連載でも述べたように「となりのトトロ」に不満があるとすれば、それはあまりにも”神対応”に恵まれた子どもたちの姿を描いているところです。むしろ私たちに必要なのは、思い通りにならないシビアな現実、避けられないトラウマや欲求不満という”塩対応”に囲まれ、生きづらさを抱えながら、どのようにそれを乗り越え、成長していくのか？というテーマなのです。

千尋はこの複雑で、怖い、そして実はリアルな世界でいかに成長するのか？そのために何と戦い、どんな誘惑にさらされ、何を見失いそうになり、そして見出していくのか？豚にしてしまった両親を元に戻すことができるのか？ この後の展開にそのヒントは隠されています。

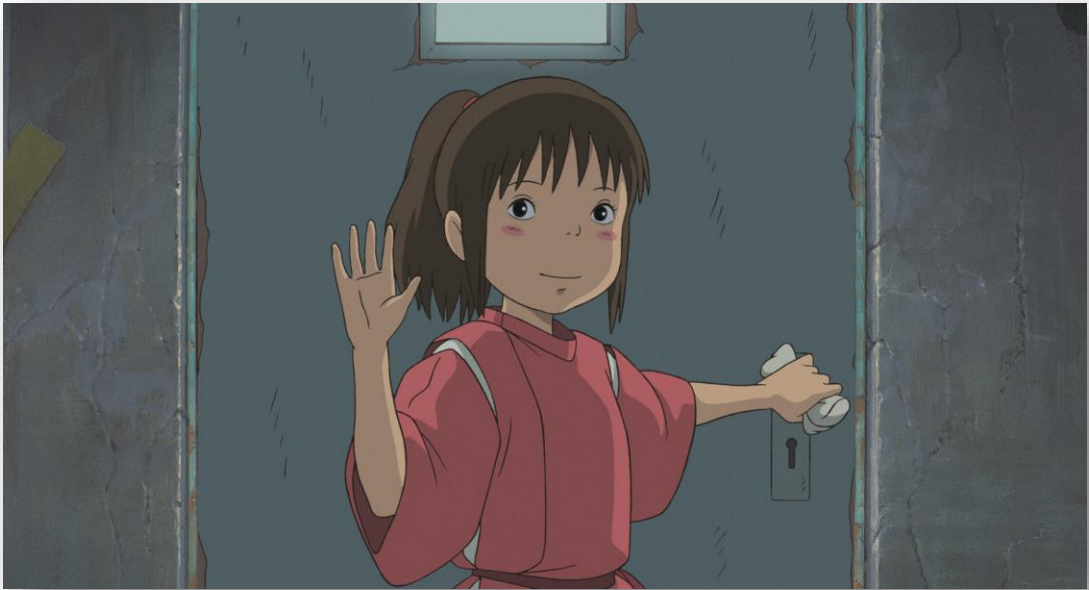
実は両親の”塩対応”には理由があり、荻野家の隠された秘密と悲しみがそこにあると私は考えます。そして、最大の謎であるハクとは一体誰なのか？ともそれは関わってくるのです。

また次回の連載でお会いしましょう。

いかがでしたか？ ほっこり心温まる＜となり＞のトトロ＞の世界とはまた異なった、よりリアルな親子の関係や、多面的で複雑な子どものこころの在りようが描かれた＜千と千尋の神隠し＞の世界。後半の謎解きもとても楽しみです。

早いもので、気付けば今年もあと1か月あまりとなりました。コロナの感染状況も落ち着いた状態が続いており、少しほっとした気持ちになりますね。日常生活や学校生活も、だいぶ元に戻り始めていることと思います。もうすぐ2年になるコロナ禍の生活。つらいことも多くありましたが、その分、大人も子どもも“レジリエンス”が鍛えられた面があったかもしれません。もうしばらくの辛抱、一緒に乗り切りましょう。

次号もまた楽しみにお待ちいただければと思います。



イラスト出典：スタジオジブリ 画像提供

編集：児童思春期専門外来
臨床心理士/公認心理師：塚原・中村・越智・根本

Chao通信Vol.1～6は、聖マリアンナ医科大学病院 児童思春期専門外来
ホームページで閲覧できます
https://www.marianna-u.ac.jp/hospital/kanja/specialty/specialty_15.html